



ぼくと犬とお姉さん

ねいむ

ぼくと犬とお姉さん

ぼくは学校へ行く途中にわざわざ公園を通る。公園を歩いても歩道だけ歩いても距離はあまり変わらないというのも理由の一つだけれど、一番の理由は他にある。

楽しいからだ。公園のどこが楽しいと言われるかもしれない。楽しみが公園しかないの？

と、余計なことを言われるかもしれない。ぼくにだって楽しみが公園にしかないわけじゃない。ただ最近、ぼくの中で流行中なだけだ。木や草、アリやダンゴムシなどの小さな生き物、人、どれもぼくにとって面白いことを与えてくれる。何かしらの発見が転がっている。その中でも面白いと思っているのが人だ。ラジオ体操している年寄りやスーツを着た大人の男性がベンチに座って飲み物を片手に空を見上げていたり、犬を散歩している人がいたり動物園みたいで眺めていて飽きない。

そして今、ぼくの視線の先には一番興味が湧く存在がいる。犬をヒモにつないで散歩をしているお姉さん。なぜか輝いて見える。これがオーラなのかは判らないけど、それがなくてもお姉さんはかわいい顔をしているので目が離せない。

ぼくはお姉さんに声を掛けたことがない。知り合いでもないし、歳も離れているし、胸がバクバクするし。正直に言うと、年下のぼくが話し掛けても嫌われることはないと思うけど、嫌われる可能性もあるわけで、それなら何も起こらない今の位置がいいと思った。が、最近になってそれが変わってきていることに気付いた。声を掛けてみたい、喋ってみたいと。

お姉さんが犬の頭を撫でた。ぼくは、テレビで観たことがあるのでこの犬の名前を知っていた。チワワという名の犬だ。ぼくでも勝てそうな小さな犬だが見た目判断したら危険だ。チワワはよく吠えるからから怖いし厄介だ。他人の犬だから余計にそう思う。

苦手なものは何ですか？ と、問われたら『チワワ』とぼくは答える。相手がまだ喋っている間に答える。それほど苦手だ。

ベンチに座って遠くから眺めているのがここ最近の習慣になっている。どうにかしてここから一歩足を踏み出せないかと思いながら、ただただ眺めるだけで満足してしまう。

今日も満足してベンチから立ち上がろうとしたら、チワワがこちらに首を振ってぼくと目が合った。中腰のまま動けない。チワワは、こちらをじーっと睨めつけていた。

なんだよその眼は。ぼくが何かした？　なんでぼくを見る？

一歩でも動いたら追いかけれそうで怖かった。だが考えてみると、チワワはヒモで繋がれている。犬に生まれてきて犬の人生で終わるように、ヒモからは逃れられない。吠えることしかできない。ぼくを怖がらせやがって……。もう心配することじゃない。

勝ち誇った顔をチワワに見せつけてから背を向けてぼくは歩き出した。

と、背中越しに犬の吠えた声が聞こえてきた。

「ふふふ。ヒモでつながれているから、いくら吠えても怖くないもんね」

さぞ悔しがっているだろうと思い、もう一度あのチワワを見ようと振り返った。しかし、先程いた場所にはお姉さんしかいなかった。

犬が吠えたうるさい音が耳に聞こえる。さっきより大きな音だった。近い。視界を広くして

探す。チワワがぼくに向かって駆け出していた。

お姉さんヒモを手放しちゃダメですってば。

逃げようと走るが体力もなく走りも速くないぼくは、あっという間に先回りされて道を塞がれた。ワンワンワン、と吠えられる。とても不快だ。先回りするとか何なんだこいつ。そんなにぼくを怖がらせたいのか。

睨めつけて、チワワに向かって敵意をぶつける。しかし、チワワには通じない。牙をむき出しにしてずっと睨んでくる。睨まれるだけならまだいいが、吠えられるのは耐えられない。あれは本当に耳障りの音だ。躡がなっていない犬はかわいくない。

ぼくも吠えてやろうかと思ったその時、お姉さんの声が背後から聞こえた。

「ごめんね、わたしのポウが」

振り返るとぼくを見下ろすお姉さんが立っていた。だけど怖いとは感じなかった。むしろぬいぐるみのようにかわいくて安心する。

「あ、はい」

お姉さんはしゃがんでポウの頭を両手で挟んで「こらっ」と叱った。怒られたポウは人間のようによんぼりしている。ざあまみろ。

「君、この時間にいつも公園いるよね」

最初の言葉を聴き取れず、誰のことを言っているのか理解できずに、何を言ったらいいのか分からなかった。しばらく黙ったままお姉さんを見ていた。が、お姉さんが首を傾げて、誰のことかようやく理解したぼくは答えようと息を吸って声に出そうとした。痰が喉に絡んだ。早く答えないとお姉さんに嫌われてしまうと焦る。

「学校に行く通り道なんで」視線を少し外して言った。

「もしかして、あそこの学校？」

お姉さんは学校がある方角を指差した。ぼくは黙って頷いた。

「私もあの学校に通ってたんだ。君は私の後輩になるんだねー」

なぜかポウがぼくを見下したように吠えた。

……うん、ようにじゃない。完全に下に見ている。ぼくが小学生だから？ そうなのか？

お姉さんがベンチを指差してぼくにウィンクした。ぼくはそれを座ってお話しましょうという意味だとわかった。なんとなくだけど。

逃げ出すのも悪いと思ったのと、お姉さんと話せる喜びもあったのでベンチに座った。

「犬好きなんですか？」

「うん、好き。君も犬が好き？」

「ぼくも好きです」

好きだけどポウは嫌いです。なんて、とてもお姉さんには言えない。

最初の出会いが最悪だから仕方がない。ポウはお姉さんの足元で足を折って休んでいる。黙っているとかわいげがある。ちょっとだけ。

「私がおね、ポウを毎日散歩させているの」

お姉さんがこちらを向いていた。その顔を見ると恥ずかしくも嬉しくなった。

こんなお姉ちゃんがぼくにもいれば良かったのになあ。

「犬になりたい」

「え？」

お姉さんの顔がぼかんとしていた。思ったことを口にしてしまったと遅れて気付いた。こいつ頭壊れているんじゃないの、なんて思われてらどうしよう。

「面白いね。犬が欲しいじゃなくて犬になりたいだなんて」

口元を手で押さえて笑っている。嫌な笑い方じゃない。なんだか照れくさくなった。

「……あはは」愛想笑いするしかなかった。

「君、何年生？」

瞳に吸い込まれそうだった。長いまつ毛とハッキリとした二重がぼくの心を鷲掴みにした。仲良くなりたい。お姉さんとワンランク上の間柄になってみたい、なんて小学生の分際で思った。

「五年生です。五年三組」

「私も五年生の時は三組だったよ。何か運命を感じる。いつも君のこと気になってた」

なんと、ぼくと同じだった。クラスもそうだけど気になっていたということがだ。

「でも、なかなか声が掛けられなかった。君は小学生だし、まったく誰だか分からない者が声を掛けたら怖がらせちゃうかなって思ったから」

「ぼくもです。公園にはたくさんの方がいるのに見ちゃうんです、お姉さんのこと」

あっ、今の気持ち悪いかもかもしれない。言わない方がよかったかも。横目で恐る恐るお姉さんを見る。お姉さんが公園の真ん中にある柱時計を見ていた。ぼくも視線を遣る。学校の教室に入っていないとダメな時間だった。

でもぼくは普通じゃないから気にしなくてもいい。だけど、できれば……。

「ごめんね、もうこんな時間だ」

「あ、別に大丈夫です。気にしないでください、いつもの事なので」

「それより、お姉さんは時間まだいいの？ いつもなら公園にいないでしょ」

「ああ、それは曖昧だから大丈夫」

曖昧なんだ。そじゃあまだ一緒にいられそうだ。

「お話、いいですか？」

「いいよ。何を話す？」

嫌われたのかと思ったけど、ぼくのワガママに嫌な顔せずに付き合ってくれた。優しい。

「お姉さん友達いる？」

「いるよ。少ないけどね」

「そうなんだ」

ぼくは、いない。去年まではそうではなかったんだけど。

友達がいる楽しさを知っているから孤独の寂しさがわかる。世界に一人取り残された感じがして泣きたくなる。でもその寂しさにも慣れ始めていると感じるときがある。だけど今日お姉さんと話していて解った。やっぱり友達が欲しい。独りは寂しい。

「君はどうなの？」

お姉さんが顔を覗きこんで訊いてきた。顔が近くて、ぼくは顔を少し引いてしまった。女性に慣れていないから反射的に体が動いた。

「いないです」

「でもそれは、さっきまでだよ。もう私と君はお友達。どう、嫌？」

なにを言っているんだろうと思った。信じられなかった。友達だなんてそんなことあるのか。今日初めて話ただけなのに、友達ってこんな簡単に出来るものだったのだろうか。

ぼくは恥ずかしくなって目を逸らした。

「嫌じゃない。嬉しいですよ」

「よかった。友達が増えて嬉しい私も」

横目で見ると、お姉さんは微笑んでいた。

ポウがお姉さんを見て首を傾げる。そして、ぼくの足元にやってきて黙って伏せて目を閉じた。噛まれないかと心配したけれどどうやら問題ないようだ。ポウもぼくを仲間だと認めてくれたのか。そう思ったら、ポウがかわいく見えた。

ポウの頭をなでようとしたが、吠えられたことを思い出して怖くなり手を引っ込めた。

「大丈夫だよ。触っても怒らないと思う」

「でも、吠えられました」

「あれは君のことが気に入ったんだよ。たぶん」

「気に入られたら追いかけられるんですか？」

「んー、おもちゃに見えたのかも」

「遊ばれていたんですね」

いつの間にかポウは足を伸ばして腹を上にもむけて寝ていた。こいつ寝相が悪いな。

お姉さんは、ツボに入ったようで笑いが止まらない。愛想笑いじゃない本気の笑い。もしかしたら、他人が困っているのがツボなのかもしれない。蜜の味.....だったかな。いや、似ているようで違うのかな。悪気があって笑っているわけじゃないんだろうな。

お姉さん以外の声がした。少し離れた隣のベンチにおばさんがいつの間にか座っていた。首にタオルを巻いて動きやすそうな服装をしている。朝からウォーキングをしていたのだろうか。すると、遠くの方からまた一人、おばさんがやってきた。両手には、水が入ったペットボトルが握られていた。

「ありがとう。それにしても暑くて疲れるわねー。水がないとやっていけないわ」

「暑いからいいのよ。汗を掻いて痩せるもの。でもねえ、熱中症にならないように水を細目に摂取しないとね。若い時と同じように考えていたら命亡くす」

「もう私達おばさんよね。認めたくないけど認めざるを負えない」

「本当よねー」

お姉さんの笑いがやっと止まった。涙を拭く素振りを見せた。

「笑い過ぎですよ」

「ごめんごめん。落ち込んでいる姿が可愛くて面白くてね、笑っちゃった」

「変わってる、って言われたことありますか？」

「言われたことある。お笑いのツボが変だって」

「ですよね」

「あー、君も思ってるんだー」

と、お姉さんの後にいるおばさんたちに視線が向いてしまう。こちらを見ていたからだ。

「どうしたの？」

ぼくは言葉で答える代わりに指を差して答える。お姉さんも解ったようで頷いて向いた。

「ねえ、隣のベンチに座っている人ぶつぶつ独りで何か言っているわよ」

「本当？ 怖いわね。あっ、怖いと言えば、こちら辺でひき逃げ事件があったんだってね」

「私もそれ知ってる。学校の通学時間だったのよね。可哀想に。すぐに犯人が捕まって本当によかったわね」

お姉さんがこちらを見たため、意識がお姉さんのほうに向く。

「ねえ、今の聞いた？ 君も通学時間気を付けなよ。車がどこから突っ込んでくるか分からない世の中だからね」

似たようなことがテレビでも何回も放送していたような。小学生の集団登校の列に車が突っ込んだとか。歩いていた人たちも、まさか車が突っ込んでくるとは思わなかったろう。

「それにしても、おばさんたちの声デカいね。電車に乗っていたらよく分かるよ、あそこは特に酷いから。グループで乗って来られたときは堪ったもんじゃない」

お姉さんが急に毒を吐きだした。何か個人的な恨みでもあるのだろうか。ああでも、このおばさんたちが電車に乗っていたらイライラするかもしれない。

「電車に乗ったことないですけど、だいたい想像できます」

お姉さんの表情が吊り上がったような気がした。何か変なこと言ってしまったのかな。

「乗ったことないの？ 珍しいね、今時。電車がない田舎じゃあるまいし」

「はあ、電車に乗る用がないので」

数秒してから、お姉さんは納得したのか頷いた。

「まあ、君、アレだしね。学校も近くにあるし普段利用しないか」

おばさんの声が再び耳に入ってきた。意識がそちらに向く。

「ねえねえ、また喋ってる」

「いやーね。危ないわね。休憩終わらしましょう。ここから離れたほうがいい」

「そうね。ウォーキングの続きしましょう」

おばさんたちは再び両手にペットボトルを握って歩いて行った。

「お姉さん危ないって」

「その言い方だと私が危ないみたいじゃない」

独り言をゴニョゴニョ言っている人を見たらぼくも危ない人だと思うかもしれない。だけど、思っていることも口にはださない。

「思っていることを本人の前で平気で口にしている人っていますよね」

「人間は、感情で動く生き物だからね。本当に厄介で最高なものだと思う」

「大変ですね、人間って」

「大変よ、生きるって」

「お姉さんも大変？」

「うん。私のこと嫌いな人たくさんいて色々面倒だったよ。こう見えてもね、私は男子からモテたんだよ。それに嫉妬した女子たちからの当たりが凄くてね。傷ついたこともあった」

苦笑いを浮かべながらお姉さんは話した。

ぼくだけじゃない。お姉さんも苦しい体験を経験している。

みんな、何かと戦っているんだ。

ぼくは地面を歩いていたアリを見た。列を作って規則正しく歩いている。エンピツで引かれた線みたいだった。落ち込んでいる時ってなんで普段見もしないものを見ちゃうんだらう。ぼーっとしたいからなのかな。それとも、悩みについて向き合うためなのか。

「君は、どう？」

「ぼくが普通じゃないってわかりますか？」

「え、うん、わかる。だって授業が始まっているのに公園にいるもん」

「ぼく、不登校なんです。学校でいじめられて嫌になって行かなくなりました」

「部屋の中に閉じ籠らないんだね」

「引きこもりではないですから。いつも校門まで行くんですけど、校門から一歩前に進めなくて。怖いんです。またいじめられるかもしれないって思うと足が動かない」

「うーん。登校しようとしているから君の場合は、不登校じゃなくて微登校じゃない？」

そんな言葉あったかな？ もしかしてお姉さんが造った言葉なのかも。

「ぼく微登校なんですか？」

「うん、微登校。あっ、なんかコーヒーみたいだね」

「コーヒー飲まないからわからないです」

「なーんだ、残念」お姉さんが唇を尖らせた。

「学校に行こうと頑張ってるんだね、君。どうして学校に行こうと？」

家で見ると母の顔があまりにも悲しそうで、胸が痛かったからだ。母さんだけじゃない、父さんだってそうだ。それにぼくは気づいた。ぼくが学校に行かなくなったことで苛めていたやつは喜ぶはずだと。そんな思いさせない。させたくない。だから――

「このままじゃダメだって思った」マラソンで走ったあとみたいに息があがっていた。

「そっか」

お姉さんの瞳は、曇りが一点もない空のようにぼくを受け入れてくれる。家族以外に気持ちを伝えたのはこれが初めてだった。お姉さんを信じられたからだ。なんとなく本能で。そしてこうも思った。お姉さんならぼくを変えてくれるはずだ、と。

「お願いがあります。お姉さんの力をぼくに貸してください」

「力？ 時間停止とか時間巻き戻しとか？ 私、魔法使えないけど」

「ついてきてくれるだけでいいです。お姉さんがいたら一歩前に進めそうだから。もちろんポウも一緒にいいです」

「変わった子だね。私に憑いてきてほしいって。普通私を見たら驚いて逃げるもんね」

「悪い感じしないですから」

「怨みがあってまだ居座っているわけじゃないからね。君は他の幽霊も見えるの？」

「よく分からないですけど、たぶんお姉さんだけです」

「波長が合うのかもね」

「ハチョウってなんですか？」

余計なことを聞いてしまったのか、困った顔をした。視線を斜め上に逸らして考えている。何かいい考えが浮かんだのだろう。笑顔でぼくを見た。

「運命かな」

「運命ですか……」 運命好きだなお姉さん。

「こうやって人と話をしたのは君が初めてだよ」

「ぼくが初めて……」

嬉しくて言葉を噛み締める。

「なんか君が言うといやらしく聞こえる」

意味がよくわからないので首を傾げていると、お姉さんが笑いながら「君にはまだ早かったかー」と一人で納得した。

「というか、私が車に轢かれた子だって知ってたんだね」

「額から血が出てますから」

「あはは、これね、超痛かったよ」

お姉さんは、スッと定規で引いた線みたいに切れている額を押さえて笑う。傷はその額だけで他は綺麗なままだ。幸か不幸か、どちらかは判らないが。

「わかった。最近暇だったし、君に憑いていく。第二の人生始まりだね」

人じゃないけどね、というツッコミはなしでお願いしますとお姉さんは付け加えた。

「お姉さんありがとう」

ぼくとお姉さんはベンチから立ち上がってポウを連れて歩いて行く。公園を出る際、お姉さんは顔を歪めた。当時のことを思い出したのだろうか。ぼくはお姉さんの手を握ろうとした。が、すり抜けて握ることはできなかった。

「残念でした、握れません。エッチなことできないね」

「しませんよ」

ぼくはむっとした。手を握ろうとした意図を間違えられたから少しだけ残念だった。

学校へ行く前に花束が置いてある道路の脇で立ち止まった。お姉さんの親が置いたのだろう。花が綺麗に咲いている。親の気持ちを感じる。大事にされているんだなと。

赤茶色の校門を挿んで二つのコンクリ色の校舎が視界に入った。

「閉まってるね」

登校時間はすでに過ぎているため校門は閉じられていた。不審者を学校内に入れなかったためだ。まさかこんなことになっているとは考えていなかった。どうしよう、お姉さんに憑いてきてもら

ったのにこれじゃあ意味がない。

「明日から本気出す？」

ぼくは首を振った。せっかくの機会なんだ。いまずるべきことだ。

背負っていたランドセルを校門の向こう側へ放り投げた。地面に激突してどしゃっと音が鳴った。校門の鉄柵に手をかける。ザラザラしていて冷たい。一度、お姉さんを見てからぼくは鉄柵に足をかけて登っていく。思っていたほど簡単に登ることができた。が、てっぺんに辿り着いてから動けなくなった。クラスのみんなの顔が思い浮かんでしまった。見て見ぬふりをする人やいじめの加害者の顔。体が憶えている。怖いと叫んでいる。

足が震えだした。

「独りじゃないよ。幽霊がついてる」

お姉さんの言葉に勇気づけられる。不思議と震えが治まってきている。

お姉さんにあんなこと言ったんだ。引き返せないようにランドセルだって投げたんだ。

手と足に力を入れて体重を掛けて鉄柵を乗り越えようとしたその時——ワン、と突然ポウが吠えた。

「うわあ！」

不意の出来事にぼくは驚いて鉄柵から落ちた。

「こら！ 今からあの子が降りようとしていたのにダメじゃない」

「いててっ……」

腰を強打して足を擦りむいた。痛みで頭が働かない。起き上がるろうとしたときにランドセルが視界に入った。投げたはずのランドセルが近くにあるということは……。

鉄柵の向こう側にお姉さんが立っていた。

「喜んでもいいことなのかな？」

「いいんですかね……？」

腕を組んで考え込み、

「うん。いいんだよ。越えようとしていたんだから」と笑顔で言った。

「現実ってこんな大体こんなもんよ」

お姉さんは校門をすり抜けて隣に立つ。

「それにここ入口だよ。まだ先があるんじゃない？」

本当は校門を通ったら帰ろうと思っていたけど……そういえばこれって入口だった。校門でさえ時間が掛かったんだから、まだぼくには早いような気がするが。でも勢いにまかせて行くべきだろう、きっと。

「でもやっぱり、ちょっと早い気が……」

「おい、こら。ここは『行きます』でしょ。ほらほら」

お姉さんに急かされてぼくは、立ち上がってランドセルを背負って歩き出した。昔とは違う逆向きに。幽霊のお姉さんと一緒に歩いている。こんなことがあるんだなあ。

ひとりでは行動できなかつたことも二人なら出来る。

きっと教室だって、これからのことだって。

お姉さんと一緒なら、そう思える。